金毘羅參詣名所圖會 三

和書門
類
二九三五五
號
一二七
函
二
架
六
冊

内閣文庫
和書
類
二九三五五
號
六
冊
一二七
函
二
架

25

内閣文庫
番號 和 29355
冊數 6 (3)
函號 176 37

地六五

金毘羅參詣名所圖會卷之二

内 一一〇三四號

目錄

西行菴久の松の圖　西行堂　西行菴遺蹟　芭蕉塚
花の井　後嵯峨院御廟　亀山院の御塔　後宇多院の御塔
仙遊ゞ石　遊墳　大墳　金倉寺
智證大師誕生の土跡　訶梨帝母社　不動明王出現の圖　永井の清水
甲山寺　岩窟の毘沙門天　世に所觀音石佛　廣田の池
雲氣の神社　筆の山　筆の海　芋畑の古跡
曼陀羅寺　西行笠掛櫻　笠松　出釈迦寺
捨身ゞ嶽　世坂　出釈迦山　大塔の旧趾
護摩壇の古趾　中山　水茎ゞ岡　西行菴の古蹟

国立公文書館
National Archives of Japan

七佛藥師堂　古驗の松　於婆の池　人面石
花立の碑　頼政箭止の松　樋戸野の池　弥谷寺
護摩峯　道範阿闍梨の像　求聞持の岩窟　盤石の二尊
加持水の瀧　降釵の古跡　六本杉　十王堂
中院　茶堂　法雲橋手掛岩　比丘尼谷　二天門　二王門
僧項川　瓶岩　生駒一正侯の塔　香川累代の墓
山崎俊家の塔　山崎志州祖母の塔　大塔冨右門の塔　穴藥師堂
天霧山の古城　香川長曽我部和親之圖　勝間の石の大塔
本山寺　高良の神社　本山寺古掘　神照寺
植田の松の圖　琴彈八幡宮　任吉二神の社　若宮權現の社
大師堂　上の菴　九重の石の塔　鐘撞　中之菴

金三ノ自ノ

龍宮風宮天神社　鹿島の神社　一之鳥居二之鳥居　宿居
十王堂　下之菴　梅腹の濱　染川　二架橋
放生川　琵琶の首　象が鼻　竹の溪
問答石　二本松　觀音寺　中金堂
愛染堂大師堂　西金堂　室塔の四趾遍照塔　弥勒堂
太子堂　龍堂　五所權現の社　青丹明神社　茶堂攝待所
五智如来石像　二王門　天神社稲荷社　日登上人の墓
芭蕉翁早苗塚　有明の濱　漁夫網曳の圖　觀音寺川口
山口の清水　悪魔石　燧灘　九瓶島　伊吹嶋　大嶋
高稲積山　高谷神社　不動の瀧　一夜菴
伊勢二郎智謀之古趾　同圖

西行庵の遺跡
久乃松
西行堂
西行塚
西行庵

西行菴之遺跡

吾通寺南大門の西二丁計りなり

久之松

菴の前に有り大木の老樹なり幹の圍凡四拍ばかりあり傳云西行法師の植るなり葉のすくなかりしとぞ

山家集

久しく経て我のちよせとうえし松神ちかくふべし人もかなしみそ　西行

世をすてゝ西行の谷の松ばかり　一本に八行なのぶきこもるなみと也

わが栽し又我すみうくそうれかぐ松は独りさびしんとすん　仝

世松の木小標石にのり正面に西行上人坐居の地久の松と雖門に

図絵に

契りおきて西へ行る行て来て我もあとの栽松のトゞぞ　道範上人

一本に八トあり有

西行堂

西行上人の石の立像を安置長凡二尺計

久の松の下にあり道普の小堂にして内に

西行上人傳云

今の世も世道小志あり況人に八あるべきなれ

一故老と記しかも人耶まで郷の子どもあるかもしれらんかい

思ふつゝ思ひ出しに乞食の中に紛れかくまでもいかなれのひゝ千

載以後十又代の動搖の集ふりけばをりにれをも何をもとも西行法師と称し

金三ノ一

たゞ新十載十二代まで意ノ二のゝ二八西行上人と侍り夫本抄に上人の位のかいこの法師と云のまゝも西上人ゝ二百八十余前に坐上人との世ゝれゝうとて仏像者

邪類に八凡僧の人道の邪に入ゝうゝ見如神の変化ゝ独るゝ此菴ゝ

結抄小上人ゝ書本ゝ奇の猪ゝて生ゝ西ゝ上のゝ人ゝ

字ゝとゝゝれ行ゝ御生世の時ゝ後成郷ハ長秋詠草に園位置ゝ

かゝ絵ゝ又定家卿文字ゝ山ゝて親行清書ゝ拾遺ゝ園位置人

ゝ書のゝ人ゝのゝ正ゝ大僧正慈円和尚の拾遺ゝ園位置人和歌ゝ

哥仏達の世ゝの字ゝ書のゝ人ゝ仏像の西行ハ此ゝ此菴者ゝ

物書ゝ中ゝ仏ゝの殿上のれゝ行世ゝ雲井ゝ上人ゝ称一番ゝ

世人ゝ呼れのゝ人ゝ況や没後ゝ其後の物迹ゝの猪集に西上人ゝ

是ゝ行ゝ今の世尚ゝ世人ゝ書べゝ大和尚位班上人位進ゝの凡僧ゝ

と彼ゝ奇仙ゝ世人ゝのゝ人ゝ弄のゝ人ゝ書べゝ

頭河云　祐賢傳正の孫ゝ行者の社に百日参籠ゝ夢に明神の御安を

菴ゝ奉ゝ人ゝ祈念の上に法ゝ現ゝ夢ゝ義ゝ寸明ゝ涙の如ゝ社頭の

ゝゝ西ゝ行ゝ詠ゝ歌ゝ八西上人ゝ住吉明神ゝ書ゝ

あらと軍阿の自記もうしと事吟抄ゝ

西行庵　今尚ほのかゝに草庵と建ていまゝの名と俗ー土人ゝ伝ふ国中の好士折ゝ来ー住

芭蕉翁之塚　西行庵のむかゝの傍ゝ自然石の碑を建

石面ゝ　桃祖芭蕉翁塚ト鐫ス

花之井　西行庵の掛の前ゝ湧ー双びもゝ名泉ゝト云西行ゝ人在世ー

有て平生ふ愛せられ

後嵯峨院御廟　岩亀寺の伽藍ゝ二十余ヶ所ゝ正中ゝ石の御塔のうゝ右亀山院後宇多院の御塔を建廊の西門ゝ園築垣繞ひり

日本王代一覧曰

後嵯峨院　諱ハ邦仁土御門院ノ第二子也母ハ源通子宰相中將通宗ガ娘ナリ兼久ノ亂ニ僅ニ三歳ナリシヲ土御門ノ大納言源通方外戚ノ親ニアルニヨリテ養育シ奉ル十八歳ノ時通方卒スル故ニ祖母兼明門院ノ許ニウツリ幽カナル体ニテ御座マス仁治三年正月四條ノ院崩シテ御子モナク御連技モナケレバ誰カ継體ノ君タルベキト沙汰アリ順德院此時佐渡國ニテ恙ナクラハシマシ其御子忠成京ニマシマシテ藤原ノ道家ノ外

後嵯峨院御廟

左右ニ亀山院　後宇多院の御塔あり

亀山院諱ハ恒仁後嵯峨院

第六ノ王子也正嘉二年八月東宮立

正元元年十一月即位

嘉元三年九月崩御壽五十三

後宇多院諱ハ世仁

亀山院ノ太子ナリ

母ハ左大臣藤原實雄カ娘

姑子也後京極ノ女院ト号ス

文永四年十二月誕生同十一年正月受禪

同三月即位時ニ八歳

正中元年六月崩御壽五十八

孫ナレバ是ヲ位ニ着申 道家相替ラズ朝廷ヲ我マニセント思ヒ關東ヘ談ゼラル叅時 兼引セズ秋田城ノ介義景ヲ使トシテ上洛セレメ土御門院ノ御子ヲ御位ニ即申スベシト云含ム申畧 泰時ガ下知ニテ義景申上バ異儀ニ及バズ

同月二十日邦 仁元服年二十三左大臣藤原良實加冠タリ左中辨定綱理髮タリ二月政始アリ三月御即位 文永五年御落飾アリテ法皇ト号ス同九年二月十七日後嵯峨法皇崩ス歳五十三讓位ノ後院中ニテ政ヲ聞コト二十年余世モシヅカナル三依テカクノ如ク安樂ニテ終リ給フト云ク

增鏡 十八日嵯峨亀山の別院藥草院ふ葬ア奉るに有然れば此所ハ御菩提の御塔ろ遊ぶ

仙遊ぶ原 遊墳 洛陵の北に向ひぞ今小堂あるて石の地蔵と安ル

犬墳 地蔵堂のかゝりふ向ひ事実詳もべ遊考拾遺の邪に出ル

鶏足山寶幢院金倉寺 金倉の郷に向ひ故に土人金倉寺と云其始ハ道善寺と云智證大師誕生の古跡ろり長一尺八寸智證大師の作座像ろり本堂東むき

本尊 藥師如来

阿弥陀堂 本堂の後に向ひ八幡宮天滿宮相殿祠 門内の右の方地の中に向ひ

御影堂 門内の左の奥にあり智證大師の尊像と安ル

訶利帝母社 御影堂並ぶ 新羅社 訶梨帝母の社の後に向ひ新羅明神と勧請ス

鐘樓 新羅社の前にあり 二王門 金剛神の両尊と安ル東向

當寺略縁起云

當寺八皇四十九代光仁天皇寶亀五年の草創にて和氣道善の建立ろるぶ故に道善寺と号ス然るに其後醍醐天皇延長六年勅ありて金藏寺と改むる金倉の郷に有ぶ故に其境北ハ海二方ハ山にて城に迦葉尊者乃入定に給ふ天竺の鶏足山の大洞に相似れば鶏足山と称ス原来智證大師誕生の霊場ろるぶ故に往昔盛んろる時ハ境内南北数十町東西十余町あるて國中第一の伽藍なり智證大師唐土にて見の所の繪図と示して飛騨の通其ユ妙をつくしろる佛殿僧房ろるをバ世に金倉寺乃

唐阿堂と申せしとなり然れども建武天文の兵乱に焼失し忽ちに其跡
と亡い只草堂に古佛真影と納め置のみなりると寛永十九年　國
守伽藍と再建したゝし寺領と寄附あるせられ再び四跡を興し
給ふとそ　則四國霊場七十六番札所なり

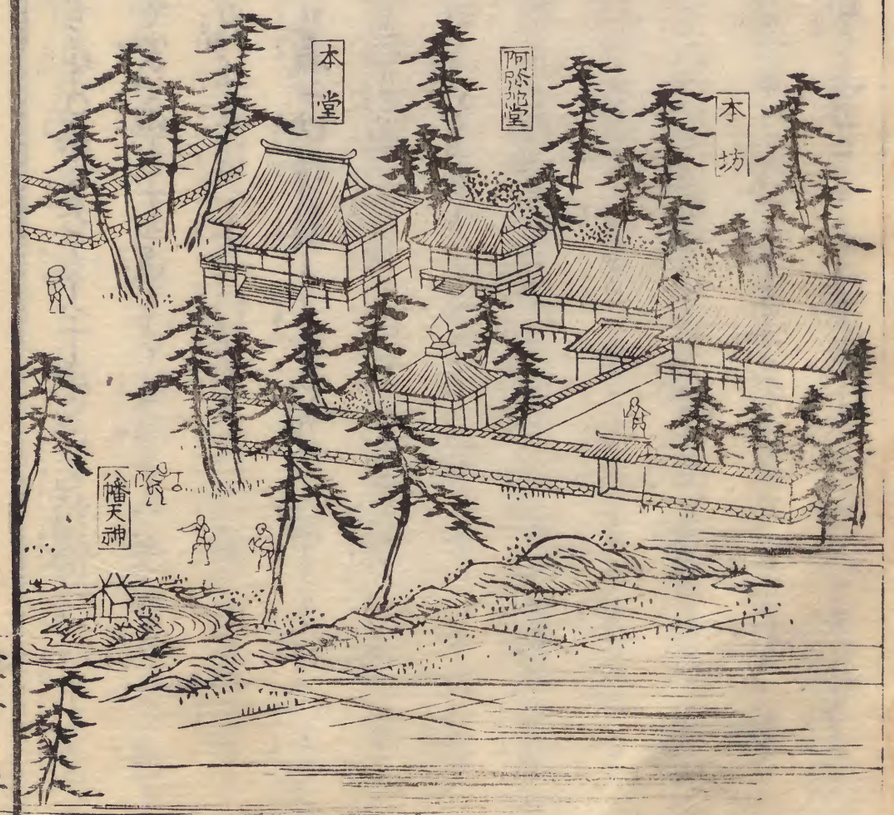
智證大師自筆の御影　清来の曼陀羅　鐃鉢　十二善神に其余什
寶評多のいとまなき事なげくまゝ略す

抑智證大師は當郷の出生にして名は圓珍姓は和氣氏父は宅成母は佐伯
氏なり則ち弘法大師の姪子にてありけり其母夢に朝日口に入と見て
孕み弘仁年に延生し給ふ両眼瞳重に項骨隆起して盆と霞如
な性質敏言敏にして幼いとも老成の量あり八歳の時父に啓して曰内
典の内因果経と言るの有べし願くは我として誦習せしめたまへと父

驚き異み即ち尋ね得て是を授る十歳の時毛詩論語漢書文選を読
み十四歳にして家を離れ十五歳にして延暦寺の座主義真を師として
事ふ十九歳の時菩薩戒を受け仁明天皇寵遇盛なり廿二歳にして南
都の明詮と大義を決擇し此より甚名朝野に播るに程なく山王権現の
告に因て奏を経て入唐し仁壽二年八月十五日福州の境に着く時に
唐の宣宗帝大中七年なり開元寺に寓し中天竺の那蘭陀寺の
僧般若恒羅に逢て梵字を悉曇章を学ぶ尋て金剛界胎蔵界諸
の印法等を授て天台山に上るに此に石窟あり其洞中に石碑
あり古智者大師説法の時これを撞て衆を集められしと傳へ是
とうてども聲なし圓珍試に小石をとりて是を打つに響き山谷に
震ふ諸僧驚き嘆ずるとの事なり又長安に入て青龍寺の法全に

金倉寺

當山の阿利帝母ハ
智證大師在世ハ再
度出現ありて教法
護持の誓願を発鎮
撫の約束をなすゆ
へに大師渡唐善
神を祭り一祠を
建立し奈礼せしめ
給ふ所うつくしき
殊更いちぢるしく
見えようつて遠近の
國々郷々より子と



願い安産をいの
りるひ懐胎の節と
求ろ又氏子とろう
て名をもひ愛敬を
願い除病をいのり
福貴をりしの賜
禄をのぞむ本の願
成就せばとうつて
ふしぎ寺の縁起ハ
委しくまろせり
祭日例月十六日
大祭ハ九月廿八日
有信の貴賤郡参
て大ふ賑ハ

竭し瑜伽の密旨及び灌頂を受て蘊は所底と倒して是を授て天
安二年高船に乗て帰朝し肥前松浦に至り留時をとる支凡七
年得る所の経書千餘巻を表上る貞観十年に井の圓城寺と次
て傳法灌頂道場の爲に圓珍に賜ふ又延暦寺の座主に成る寛平二
年僧都に任ず同四月廿九日逝る時に年七十八嘗て耳目聰明に
して食する物精潔を擇び門弟阿闍梨の位を受る者百余人手自
剃髪する弟子五百余人延長五年智證大師に謚賜ふ
初め入唐の時難風暴に起て船異國に漂流し圓珍日夜南て不動明
王を念じ時に金色の人忽然として舳先に坐し順風来て
翌日福州に着岸し則ち拜する所の像と再て命じて國に帰
り以来二井寺一流の不動尊皆金色にして其余奇特枚挙とすべ

金色の不動尊
難風をしづむ

永井清水　永井村にあり土人印の清水なりもつて其事実詳なり此井泉いつゆ地名と永井といふや迫瀑に変じ清泉にして四時とも涸渇なし分て夏の冬暑に往還の旅客渇を潤す一式西風おんぶとなり冷にて南ふ

醫王山寶院甲山寺　廣田村にあり土人甲山寺といふ四國遍禮七十四番の札所なり

本尊　薬師如来　長二尺五寸座像　弘法大師の御作本堂東むき

御影堂　弘法大師の尊像を安ず木堂に並び鐘楼　門内にあり茶堂　同西に並び

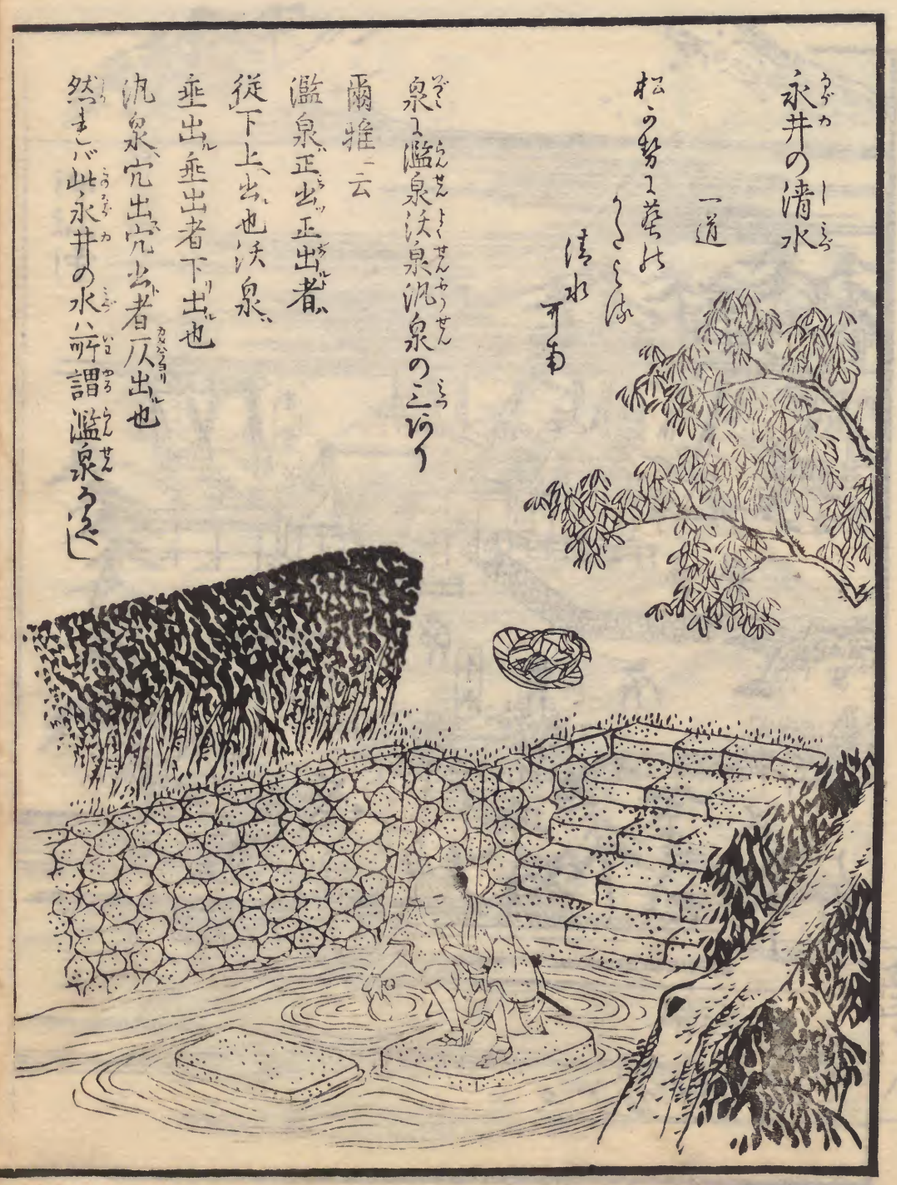
窟毘沙門天　大師堂の後窟の内にあり弘法大師の作厨子に石を以て刻む山中に八西国三十三所の観音の石像を建営ず

本坊庫裏　門内の右にあり　石橋　門前の川に渡ず

當寺往昔大伽藍にして堂塔魏々たりしかども後年荒廢して其跡と矣に殆まぐも本尊瑠璃光佛い大師の御作にして霊験尚ほのこりぬ

後い山林盤根に赤ハ曖昧と見るに〜田畠編のごとく民家相接まり

廣田池　廣田村にあり夫朝比奈の池にして傳云昔朝比奈弥三良武士にして対北に其墳池の中にあり故に名く然るに後年崇るにあるが如く侵の丘にあり故に名く



金三ノ八

雲氣神社　廣面村にあり延喜式出雲度郡二座之内
後世中絶して雲氣塚とのみ古跡あるのみを近曾再興せり

三代實錄に貞觀元年授讃岐國雲氣神五位下とあり

筆の山　廣面村の向に高く聳ち

山家集　筆の山のかさのゆきしてもみつる若葉かな　西行

筆の海　同所にあり八幾の田畠にうつして其名のみ殘れり往昔は筆の山の辺まで海なりて藤の浦おごろの浦などと名づけしなどそ倉橋うつ紀ゝく眼
なりつゝ通のゝゝ分てぞもつゝる筆の海かゝまて□はふつゝ海あり
西行の歌ゝ後人の詠ゝ尚考べし

日蓮のもゝゝぬ素や筆の海　玉光

月雪のうげやもゝゝき筆の海　渡物

芋畑の古跡　同村農家の傾根に標石あり左の歌を鐫ル

月ゝとやいりのよどもぶ祢のしを起ゝ第ゝ何ゝ苦ゝさ　西行上人

芋畑の古跡

芋ゝゝ月ゝ
ゝゝゝん
ゝゝ鍛　作者不知

芋ゝゝゝや跡ゝ
ねゝもむなゝり水　山川

芋の葉や月ゝ川
里乃
やゝゝ畑
芭蕉

我拜師山延命院曼荼羅寺　段原村ホリ四国遍禮七十二番の札所なり

本尊　大日如来　長二尺五寸立像　弘法大師作　本堂東向

護摩堂　本堂に並ぶ　大師堂　本堂の南ホ隣る

鎮守権現社　大師堂の南にあり　鐘楼　大師堂の向東傍にあり　茶堂　鐘楼の北の傍ホにあり

二王門　北向門内両側櫻の並木あり　笠松　本堂の前にあり　園凡廿余間

西行笠掛櫻　鐘楼の前にあり櫻の下ホ標のごとく立て西行上人の哥を勒ス

四國のくにくにあるきあるく同行の那へかあるきあるく

ゆくゆくくにくにのたつとをもふもたのもしきかな那へかあるきあるく

かの同行のにんにんとて世捨ひとをとゝけまいるとをんなく

笠ぬぎすてゝ身はいのゝ成わるんのれるあるがあるがあるが

曼荼羅寺

傳云
大師善通寺と建て後入此寺と建の
小金堂両部の曼荼羅
羅と地と封ド此堂
を立薬師七軀を安
置しの故に曼荼
羅寺と号ク

逍遥院

それとなくうへしたて
ゆきハ
山ゆくまれるをき
ゝ
ゝ

金三ノ九

千載集
世をすくふ誓ハ
むなしく
かりそめの
たのめ
時しらそ
ふる

藤原定長朝臣

二町四方林木鬱蔚して清幽都て塵寰と忘るべし

聖寺元杲仁海成尊の二名徳の遺跡とゝ伝ふ彼お師の手と曼荼羅

寺延命院ゆゑゝ彼此異なるべし野の寺ゆゑ正行院いやゝ今世寺

大師御建立の時より今の名のゝ野の寺も此寺の名と取るゝ以上雲石堂説

我拝師山出釋迦寺曼荼羅寺の奥院三丁計奥ゆく七十二番の霊場の前札

所ゆゑ近世宗善ゝ寺と建立ゝ云

本尊　釈迦牟尼佛　弘法大師の作秘佛なり

大師堂　本堂に並ぶ　茶堂　門内の左ゆく　鐘楼　門内の右ゆく僧坊

瓦の札所と言ふ八十八丁上の絶頂にあるゝ岩ゝ所ゆく堂舎ゝ甚道嶮

岨ゝて猶人登る事と得ぬ故ゝ後世此所ゆく寺と建ゝ札と納むゝ

捨身ゝ嶽　山上の嶮ゝて所ゝ時永法利生の御試ゝ二宮ゝ捨身

ゝて捨身ゝのゝと天人下りて取上るゝゆゑゝ名ゝ

世坂　峯ゝ登る嶮路ゝ猶人杖ゝ岩ゝ取て登臨ゝ

金三ノ九二

山表集

はんざゝの行道ゝ所ゝ八十八ヶ大寺ゝて

やゝ有大師の御経かゝ所ゝ山の嶺

ひゝゝゝのゝ八一丈ゝ檀ゝて建ゝ夫

日毎ゝ登ゝ世世ゝ

行道ゝ

ゝ登る程の高ゝ

わゝ行道ゝ極も二重ゝ

ゝ大師ゝ

ゝ巌ゝ

出釈迦山　我拝師山ゝ大師此山ゝ修行ゝ時雲中ゝ

釈迦如来出現ゝ大師拝ゝ

山表集　夫ゝ上ハ大師の御師

ゝ山ゝ

ゝ山上ゝ今ハ其跡ゝ

大塔建立跡　行道所ゝ

山表集

出釈迦寺

新候古今
[illegible]
[illegible]
越[illegible]
雲の[illegible]
の相[illegible]
後宇多院

[illegible]
曼荼羅寺より此所へ出る

金三ノ九三

大師御経
を書寫
此山峯ニ
埋申也
[illegible]と
云

我拝師山

大師堂

本堂

鐘楼

手水

茶堂

地〳〵海〳〵る雨のふる塔のつ〳〵そ〳〵ふる
ひう〳〵高野の大塔ぐ〳〵ふる塔の行ふ西苔ハつ〳〵
〳〵づ〳〵たまぐも石大〳〵ふ行〳〵ふんぬふ
中山　我拝師山ものぼ〳〵ぶ五岳の其一なり

護摩壇古趾　大師護摩僧修行のひ〳〵趾〳〵そ五穀の灰ふり〳〵ふ

水莖の岡　曼荼羅寺ゟ二町計西へ行西行法師寓居の草堀あり今尚草庵あり　西行上人の像を安し拾遺の篇に委〳〵図を出し

山里〳〵はせ世〳〵〳〵ん友もゞる悔〳〵もふ〳〵首〳〵ん　西行

山里と人来る世〳〵ふ〳〵ひ〳〵ど問ふ文と陳〳〵あるゆ〳〵　仝

山里の杖付事〳〵男ひ〳〵ぶ苦〳〵ふる来杖乃風　仝

教ものゞ〳〵ものもんの杖〳〵落れ出ぬそ〳〵海〳〵来ふ　仝

本朝遯史曰西行以在讃州多度之菴而所詠之山里待厭世之友一篇渡難波而所詠之難波春夢蘆拈風度一篇後恵深歎美之云〳〵

金三ノ九四

水莖の岡

小町能因ハ斉の徳七
りて雨とゆ〳〵せ奥之
〳〵此聖ハふる雨と晴せ
し妙〳〵ゆ〳〵廿人余記之人
生涯のるゆ〳〵夢ハ寄端
筆て牧ふ〳〵ぶ〳〵

西行上人　五百年忌に

連翹や
こゝの石の
日と
ふゝ
ま
り
胡及

山家集　れ　れ　し　國　し　大　師　の　ゆ　く　う　海　の　う　ら　に　ま　ま　し　て　こ　ま　む　す　び
く　な　く　な　ま　ま　し　て　海　の　う　ら　に　雲　う　す　く　な　く　な　れ　ば
雲　う　も　な　く　山　ま　く　海　の　内　な　れ　ば　な　ど　水　の　絶　る　ひ　う　る　も　西　行
な　る　ま　ま　に　ま　る　の　い　し　い　な　れ　に　な　く
今　ま　う　ま　く　と　今　あ　ま　ば　か　る　な　な　の　な　れ　も　も　な　れ　仝

治承二年の秋より二四年西國修行の旅に出て住のふしとこ年撰集抄
も造りのこり其末壽永二年正月廿二日菩提寺にて書終まうしぬ
此善通寺にいる八人の私乃庵といふ所うしんん

水茎の岡の湊　同所の坪下まで昔海にて前にいふ筆の海もおひ
且此水茎の岡の湊にて緒船の泊りしるべ

萬葉集　天霧相日方吹羅之水茎之岡水門爾波立渡

仝　天茅とにる八弥谷の山上天雲山のころ已水茎の岡ろ向に見る

夫木集　水茎の岡は湊乃波ろも筆の海てふなるや立渡　為家

金三ノ北五

本朝通紀前廿五曰保延三年秋八月佐藤兵衛尉藤原憲清遁世
憲清者武衛校尉康清之子藤秀郷九世孫也達弓馬之藝又讀書典有
螢雪之勤且習管絃工和歌曾出奥州郷里到京師奉仕鳥羽法皇法皇
以憲清任左兵衛尉爲北面之衛士毎應制獻和歌恩遇日渥然憲清素
有避世之心不屑恩寵一日憲清從弟佐藤憲康者携手退公憲康語憲
清已余先祖秀郷征叛夷以朝廷之藩護其餘慶延至于我濟而朝恩稍
厚然人間之榮耀不可久特彼山林之下豈無所係慕乎憲清感泣而招
別明晨憲清爲候鳥羽院往扣憲康之門門外人聚戸内羣悲憲清問之
家奴曰昨夜主人俄没其母七十歳其妻十九歳憲清大驚彌催哀念乃
將遁世而自謂不拜恩君遁世者於我不慊也直到鳥羽殿先陪御遊之
席而後奏請出世間之望上皇不肯容憲清不得止帰家脱冠刀終出家

改名於圓位其後改名西行親近之家人亦出家相從號西住西行情不
淫富貴不阿貴家慈周遊天下無名山景境不歷見之地皆以詠和歌自
樂風花雪月皆以自詠遺興西常謂和歌者禪定之修行也我由和歌得
佛法西行將赴關東芒鞋竹杖到遠江國天龍灘寄身於武夫之舟舟中
人妻將湯翻呼曰僧等可自舟下西行之曰借舟之便者旅僧之常不退
一人怒以筆扣西行頭出血西行無少恨憤優然下舟而去西住見之泣
西行之曰余出塵固知如斯之事不虞之禍猶有大於此何爭乎汝宜帰
鄉西住不得止東西相別自是西行獨歩益縱行脚

一書云西行聖人俗姓藤原氏従四位上鳥羽院の下北面左兵衛尉義清と
号す又則清憲清も書くあり然をバ義とのりく訓ず儀と同ドなれバ
結るべしさると義清と訓て義と訓決ると上ノ夕結と見べくもさども義と書て

義と訓くと說謠くて結るべしく云職原大全上北面諸大夫四位五位仕之是
今舞殿下北面侍之官也萃菴曰禁中龍ヒ院系而為下北面候武者所
法名圓位千載集拳此名大寶坊と号し亦西行と名づく新古今集載此名

○大職冠鎌足公——不比等——房前——魚名 河辺左大臣 正二位

藤成 伊勢守 従四位下 魚名公五男
豊澤 備前守 従四位上
村雄 左衛門尉 従五位上
秀郷 俵藤太 従四位上

千常 従五位上 将軍
文脩 将軍 内舎人 書公脩
文行 左衛門尉 従五位上
公光 書相模守 右衛門尉 従五位下

公清 宮内 左衛門尉
李清 左衛門 従五位下
康清 左兵衛尉
憲清 下北面 西行

七佛藥師堂 葭原村於婆の地の傍の草庵堂あり観世音弘法大師おを安置し
本尊 瑠璃光佛 弘法大師の作
古驗之松 草庵の傍あり大師の植の所にて霊驗ありくぞ松の下標石を建

金三ノ廿七

於婆池　正字未詳　七佛藥師の堂の後一面の大池にて恰も湖水のごとく国中大池の表

鳥坂人面石　樋戸野村鳥阪の山中にあり高サ凡二丈余巨巖悪相の人面の如し

花立碑　鳥坂の里端を往還の傍にあり碑銘累累拾遺の篇に委く著べ

そもそも山道條ハ豫州通行の街道にて人馬往来平生不絶べ

頼政箭止ノ松　厩田村にあり甚事実詳らかなべ

樋戸野ノ池　樋戸野村にあり大池なり天霧山尚ほ一名也

鈴五山千手院弥谷寺　大見村にあり四国霊場第七十一番の札所なり

本尊　千手観世音　長三尺五寸立像弘法大師の作大悲閣の左に弥陀と安置

此尊像のごとく千手院と号べ

脇士　不動明王　毘沙門天　右同作なり

護摩岩窟　崖腹に穿ちて護摩檀の洞あり石壇の上に不動弥勒弥陀

の尊像を安置べ

道範阿闍梨之像　右窟の内の傍に豆ハ範師此国に配流の時當寺

の住持の所望にて行法肝要抄を撰ませられし彼

書の奥書にあれば甚住持かごの此條をつくりおけ

るゆやトそ

七佛薬師堂
古驗松
尾場ノ池
天霧山
天霧山
ヲバノ池
古驗松

薬師堂
ヒドノ池

鳥坂人面石

あの〜〜〜〜
出来しるる
杉見ゆ
〜〜〜

水聞特巖窟　奥の院〜絶壁九丈八尺三間の岩窟内の四面の石面八五佛屋堂藏地藏ホと彫刻し又大師の御両親〜擬らへ〜〜〜〜て弥陀弥勒の石像と安し補人〜〜〜ち御両親〜て拜し

拜堂　南面うけ造り〜〜

三尊弥陀佛　本堂の左の盤石ホ弥陀三尊空海の名号九行大師の御筆〜〜

藏上權現社　護摩岩窟の左の山上〜〜〜長九尺弘法大師の作則ち當山の鎮守〜

加持水瀧　護摩堂の右の方〜〜〜　水祭納骨所　共〜瀧の下〜あり

辨財天祠　瀧の上の方〜〜〜　降釼所　瀧の左の上〜あり五柄の釼字〜〜降り〜〜古跡〜〜

六本杉　瀧の下〜あり　天神社　權現社の下〜あり　鐘摟　護摩崖の下の方〜有

十王堂　鐘摟の向ふ〜〜〜　觀音堂　西国三十三所の尊像と安し十王堂に〜〜〜

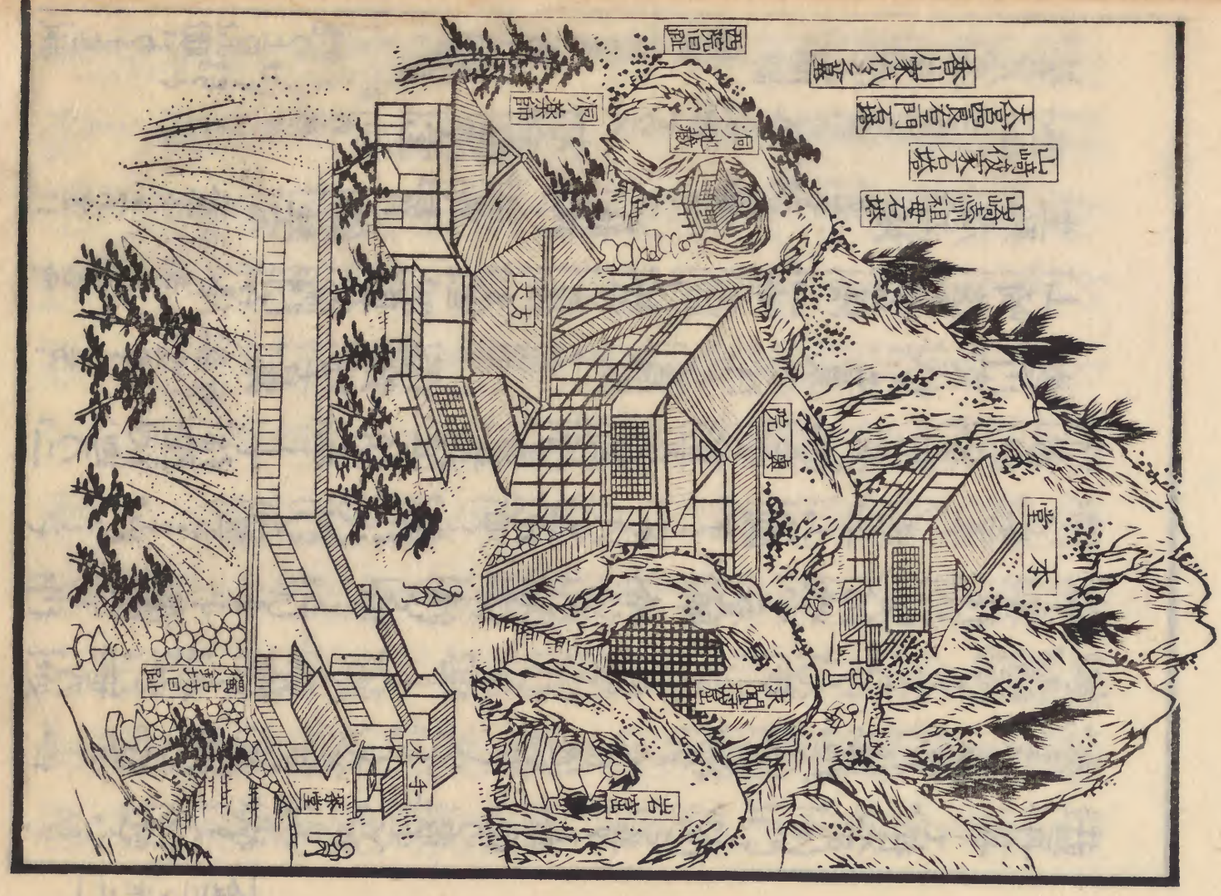
中院　觀音堂〜〜〜〜ぶ弥陀釈迦の二佛と安し　洞地藏尊洞藥師佛方丈の傍〜有

茶堂　方丈の門前〜あり　法雲橋　瀧項に渡し　手掛岩　法雲橋の傍〜〜〜

二天門　特国天多門天と安し　金剛神の両尊と安し
本堂下〜〜三丁計下有　二王門　二天門の向〜〜あり

金三ノ三十

国立公文書館
National Archives of Japan



金三八尺一
中院
十三仏観音
十王堂
大師堂
鐘楼
大師堂
大師堂
大師堂

比丘尼谷 東院之旧趾 権現の社の東にあり 瓶岩 二王門の上の山頂にあり其形似くるとして号く
水谷 二天門の前の流の水源とす 穴薬師堂 川の向ひにあり
生駒廣石塔 名号石の嵯にあり 籠所 石塔對ス 納経穴 本堂の右の方にあり
山崎俊家石塔 山崎志州祖母石塔 大宮四良右衛門石塔 共に本堂の西にあり
香川家代々之墓西院之舊趾 右小同ド 獨鈷坊古跡 茶堂の下の方にあり
抑當山人皇四十五代聖武天皇の勅願にて基菩薩の開基にて弥陀釈迦乃二佛を安置し蓮華山八國寺と号ス蓋絶頂に登れバ州を一望するゆゑ故に其後弘法大師此山に登臨し給ひ水聞持の法を修し給ひ虚空より利剣五柄降り金色の光赫々たる藏王権現と現ず大師に告給ひ此山八葉乃如来説法の地観在菩薩埵度生の砌り菩薩願ハ千手大悲の尊像を造り伽藍再興して秘密の法門を開き普く無縁の衆生を救ひの我も又法味をうけて

金三ノ卅二

鎮守護せんと願給ひ大師すなわち千手大悲の尊像を造り新に精舎を営み給ひ且藏王権現の形像を彫刻し鎮守として給ひ実剣五柄降るを以て剣五山と号し大剣の御山と云ふ五の字の音同じくして大師窟と穿り佛像と彫刻し或ハ巌石に阿字を鐫り五輪塔弥陀二尊大日等とのゝ〳〵せり其余名号剣形宝塔形などのごとく〳〵一山に有ゝ所の怪山奇石ごとく五輪佛躰にて目の接る物足の趾ゝ所高峯深谷に至るまで不思議の神跡とのゝ〳〵言ゝふ故に佛谷佛山もしくハ凡當山嶮崖崖嵬ゝ〳〵幽迴にして隣おのゝ〳〵彼霞と眼に風に駕する人のゝずバ唯ゝ此に至らんや雲霧常に起て実水異草盤〻岩端泉流し清精神凄然として嘗欲更に消ん将ゝ〳〵八霊宝若干ゝ〳〵数回兵乱の為に失なる物多〳〵就中一奇の実宝ハ大師所持の紫銅の鈴あり圓に四天王乃

像を彫其間に二胎拝と刻む拝とるの唱歎せざるい吉文は尚此余是と
畧仏也如監僧坊わも長大燒失し且享保五年の春火災かゝりて燒亡
仏今東院西院わど其間趾のゝ蓋傳云此峯に登臨する時八州一望
とるゞ故ゆ八國寺と号しゝ何之の時より弥谷と書わゝはせりこれハ
全く弥やの音にまりて八のそよりかゝ國八谷の音同どさゆゝ成りしいつ或
云此説後世附會の説わゝん弥谷八山の俗号にして二朶の峯東北西
に峙ち溪谷弥に妻もる故に弥谷とよぶ弥生弥猛の類ひるゞ下し
天霧山　弥谷山の艮に連る高山ゆり香川信景の搦竜る古城の跡ゆり攀に出乃
趾今戰の旧跡ゆり安〻〻拾遺の美に著ハ
本朝南海治乱記云香川氏其祖鎌倉権五郎景政より出て下総國の姓氏也
世〻五郎と以て称し景とりつて名とし細川頼之より西讃岐の地を湯つて
妻度郡天霧山と要城〻〻妻度津ゆ居住せりと又妻度に所豊田郡の

主八香川氏より居城妻度津雨霧山也と云〻
同書此雨霧ノ城と云八險阻の高山にして大手の路八馬も上れバ大身
山城もり上の分内も廣くして大岳とも納べし水八澤山にして早魃と
も乏しかゝ〻ば險要の名城なりと云〻
天正二年冬香川兵部大輔元景織田信長に服従し幕下に候せ
んと支と乞ふ信長悦喜斜なゝ〻使者の演説と同給い餐雁つと
給し明日報答わつて香川元景に一字と賜て信景と稱ハ
天正七年香川信景土佐の長曾我部元親と和平調ひ元親の次男五
郎次郎と濱州へ呼むり養子と家の女子に妻ハせ婚儀と調本城と
渡さる此時とゝに妻度津こ野豊田に那珂郡と加て四郡の主なり其
所柄も豊饒にして衰乱の世といへども自余の兵将に越しなりと云

香川長曾我部和親

天正七年の春天霧
の城主香川信景
土佐の長曾我部と
和平とは香川方
の質として香川山
城守河田七良兵衛
同孫太郎二野菊
右ヱ門四人の家老
と二人づゝ上州一番
代に結ぶも信景も
岡豊の府に出仕して
太刀馬綿

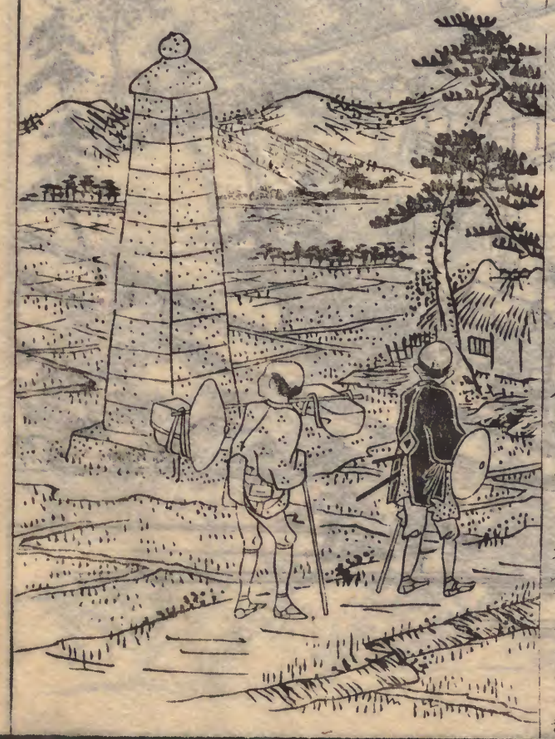
細ホのまさ進
ぜゝるる元親も
別て用ひらま
食も正式の膳
部能礼舞ホ
ひろう五百
滞留
あゝ
飯国の
ゝ沢國分
ゝ茶屋
と立て
送り酒
迎ひのう
ぞ

天正十二年羽柴秀吉四國征伐ニもつて香川信景敵ーゞ〻養子
五良次郎親政の縁ニ随ひ雨霧山の城と去て土佐國ニ引取〻ぞ
天正十五年八月生駒雅楽頭正規讃岐國と賜る其頃生駒讃岐守一正召出
〻侍士の内ニ野薗左衛門河田七良兵衛の両人香川信景の家老ニして名
高き勇士各二千石と下され抱らゝむ両士も小男子數多ありて是ニ分ちれぬぞ
又天正十四年豊後の大友援兵の時長曾我部信親十河存保と共ニ戰死と致ス
香川民部少輔ゝ〻るゝ是雨霧の城主信景ニあ〻ば北條の香川ゝ
勝間石塔　勝間村の田圃の中ニゝ〻高凡ゝ丈弐十ゝ重ニ積ニ土俗ニ弘法大師の作ゝと

本山寶持院長福寺　本山の庄ニゝ〻故ニ本山寺ゝも号ス霊場七十番の札所ゝ
本尊　馬頭観世音　長二尺五寸　弘法大師の作
脇士　阿弥陀如来　薬師瑠璃光如来　右同作

御影堂　弘法大師　本堂の左の向ふあ〻り　茶堂　大師堂　並ぶ摂待所ゝ
大塔ノ跡　本堂の右の傍あり小堂ニ建る　十王堂　大師堂ニ對ス十王ニ
鐘楼　大師堂ニ隣る　庚申堂　青面金剛童子と安ス　五所権現社　庚申堂
二王門　金剛力士の像と安ス　銀杏枯木　十王堂の傍ニゝ〻至ての大木今ハ枯て
幹のみ存ス黒俗是ニ祈願ニ甘藍ニ者ニ

無垢淨光陀羅尼経曰
造石塔功德有七種
一、十萬歳生天宮
二、得長命三、得那羅延力
四、得千万歳内國王位
五、得遠離生死身金剛不壞身
六、得三明六通果
七、得四十九重寶殿



春の海
ひねもす
寄乃
夜音哉
巴静
ゆきもむや
閑伽棚に
水汲音
寄湖
十王堂
イヤイヤ泉
五所権現
宝蔵堂
二王門

本山寺
高良社
本坊
本堂
塔趾
大師堂
茶堂
鐘楼

金三ノ卅六

當寺ハ大同年間弘法大師建立の伽藍にして往古ハ七堂魏々たりしかども
天正の兵火にかゝり悉く焼失ハ然れども本堂ハ恙なく存ずるゆゑに是佛
今に安躰なり境内に先ハの大樹枝條枝蹤にて幾世を経ぬるむかしと
問ふにひさしかり本堂の後に古さ五輪許ありの事實詳ならねども
遍年の古物なるべし前に長流の川あり二王門をゝ入ハ観音寺に到る街道
本堂左の脇なる門ハ弥谷への通路にして蓋此地を本山の庄といふ此より海辺へ
七里の岬にいたりて其山の本なるゆゑに是ちかくして則ち海岸の端を箱の岬といふ

高良神社 本山寺の右に並ぶ當村の生土神なり
祭神武内大臣なるべし

本山寺之古楠 本寺より二丁計東田圃の中に本山寺建立の時造りし拄なりしを里人の縋區なりしを祥にして笑まれども千歳の古物といふべし

七寶山普門院神照寺 植田村といふ俗に植田の天神といふ本堂南向草庵東向ふ
本尊 観世音菩薩 天神社 本堂に並ぶ 辯財天祠 天神の社に並ぶ
菅公を祭る

天神之松 神照寺の境内に技條を偃れ俗に植田の松ともいふ
樹の高さ五丈余幹の大さ壹丈五尺廻東の技廿五間余西の技十五間
南北之技二十三間余年々盤茂して技毎に数本の束技を立て是を
支西寞や泰山の松樹始皇の雨を禦ぐ形勢も想像るべの大木
いかに往返の旅人なるに来て賞美せざるといふ支なし

本山寺之古楠
土中を出ること凡五尺余首に
抱を納ること盤あり木ハ正く
擇るべし本山寺建立の殘木
ふるき言傳ふまじくも何の故と
言ふに詳らかなる都會の地にいかもせば
彼長柄の橋拄のごとく言ひてやはり一奇の希有なり

植田天神之松

めくるはる　さんくろ　乃春

松ゝけの　新緑ハ　かゝるく　高社　もも　おし

金三ノ卅八

かをるくん　あれハ　ゆるしの　きそ　くく

庭を　かゝ　面も　松の　しる　そく

雅軒

琴弾八幡宮　観音寺の境内にあり霊場第六十八番札所なり　社僧　観音寺　委しく次に記す

本社　應神天皇　大寶二年豊前国宇佐より御遷座

高良社　武内大臣本社の右に並ぶ　任吉社　任吉二神本社の左に列る

若宮権現社　住吉の社の南にあり　大師堂　弘法大師上之菴　大師堂の傍に有休所也と安し

鐘楼　本社の階下にあり　九重塔　石にて造る鐘楼の傍にあり　中之菴　山の半腹にあり

龍ノ宮　風ノ宮　中之菴の向に並ぶ　天神社　中之菴の下にあり　鹿嶋神社　梵の岨休所なり

一之鳥居　巌の坂口にあり　二之鳥居　山の半腹にあり

宿居　一の鳥居の北の傍の芝原にて例祭八月十五日神輿此方に渡御のよむ年毎に行宮といふむ當日濱辺において競馬の例式あり

十王堂　宿居にあり　下ノ菴　十五堂のくだりにあり　梅暇の濱　此所の濱辺をいふ

當社八皇四十二代文武天皇の御宇大寶二年豊前国宇佐の宮より八幡大神宣に移らせ給へるぞ其時ニケ日晝夜くもり西方より天鳴動し黒

雲おそひ日月の光を隠し國民あやしく如何なる事ぞとまどふ所に西方の空中より白雲虹の如く併て當山にかゝり終にして此山の岸梅暇の海濱に一艘の怪船あり中に琴の音あるして其音美妙にして嶺松に通ふその須此山に止住の上人あり名を日澄といひ此上人船に近づきて問ふ汝何ぞ此に在るや答て曰我八幡大菩薩神人にて在るが故に此に来れり帝都に近づき擁護せんが爲に宇佐より出山地に来るが故に旋ぐと上人又曰疑惑の凡夫に異端を見ざれば信じがたし希く遇逢の人のまに〳〵霊異を示給へと然るに其夜忽ち海水十有余町の程緑竹の茂藪となり又沙濱十歩余松樹の林となる土人郡郷に觸て十二三家の童児ホの欲染むさりの数百人を集めこの山の竹乃谷より御船を嶺上に引あげ齋祀し琴弾別

宮に歸し奉る御琴幷び御船今に殿内に崇め奉る尚奇怪の霊夭数回の事ありしとうん則ち此船神功皇后異国征伐の時に乗のひ給ふ艨艟もうもう言傳へ蓋八幡の御支へ朝家の御宗廟にいひ別して異國降伏の夭神なる故に當宮西海に臨み給へ其余式内大臣任吉明神若宮権現の祠とくしめ七十五神の伴社山中に充満し中にも青丹明神と以て上首しに此山岩壺崎嶇にして二方は滄海渺々たる山嶽は神秀夭仙の虛宅なる所といへべし半腹に巒表と立禁に石の鳥居あり近世勅額を給はり縁起は権中納言實秋卿の筆にして足利將軍は花押あり

什寶

○御神琴　神皇后御遺器大宝元年自豊前国宇佐宮御遷座之時船中御愛撫之霊琴今猶存當社第一之夭宝最海内一品也

○御船之霊材二箇　同時御着岸之御乗船残木也

右御船往昔より寶殿に納めなてまつる所寛保廿一年丙辰春三月八日の曉災火に罹りて燒失はべりしも其材二箇全く燒て紙ばかりて今に存ぜり琴彈八幡二所大菩薩御垂跡御縁起云今此御乗船是神功皇后異國征代之時自然出現之兵船也云

又曰出現一艘船是非人倫之造非化人作竜宮出現之兵船也即不論氷陸虛空神通宝船也

○古鏡　一面　神代遺品　神功皇后御愛物

右の寶鏡上古宮殿の裡にして失ふ数年を歴て二十三世住僧正高源兼元四年庚午に二つ出て池中に湧き上代の図と似て異と合はに遠ばば又重量も同じとこれに依て神鏡なること知る最威験ありしと故に池と号して綾の池と云今末院の地内にあり院号を鏡照院と云

○三所御剱　二振　三条宗近作　源義経公寄附

○源頼義公御願書一通　○源義経公御願書一通

橋下の河原ハ
在家より来て
て洲市を設く
橋人の
礼は
あさや
けしき
市
楚日

梁川　琴弾山の麓にあり
川上にて八鹿熊川とも
三架橋　梁川ハ架ハ
三橋つゞけて架るゆへ
橋詰ハ観音寺の町にて商家多
建つゞけて賑ハ一町家凡四十軒在家
二十箇村あり
十景　梁河遊魚
梁川青紫
水原
魚のうろこん
仝
千家長亭
ひのもとにやとりとあるこゝの納
こゝろいやし
里

放生川 蘇の東と流れ深川に合ス

琵琶之首 放生川の流れ積の上の方に岩ひゝ山所洞うゝ是と号く 由緑未詳

宿居

梅腋の濱 宿居の辺の濱と云ス

一之鳥居

鹿島社

○長刀一振　又長二尺五寸柄長五尺六寸
天平勝宝元年十一月廿九日諫議太夫石川年足奉納
○地藏菩薩画像一幅　香川中務信景奉納
○菅家御筆　五通　○嚴有院殿御條目　一通
○三千佛名経　足利二代将軍義滿公御筆
○大般若経　壹部六百巻　後鳥羽院勅筆
料紙長二尺五寸　文字行長八分
観應三年辛卯二月廿四日琴彈神宝目録記之　細川頼之寄附
○法華経一部八巻　並開結二経　大江中納言匡房卿御自筆奉納
開経八無量義経　結経　普賢経　五色料紙用之
○琴彈山繪図　一幅　土佐将監光信筆
○七寶山縁起　征夷大将軍源朝臣（花押）
右義持卿ヨリ

金三ノ四十三

奥書云應永廿三之暦仲春下澣深疎毫訖
又云　此一巻者古来當山所傳縁起也今令按察使
前中納言新写且手書外題以奉納八幡宮神殿
旨延享戊辰夏六月（花押）

琴彈の山松風ふきて思ひよるさゝなみ人　春雨亭
勝地探奇古祇林　松風颯々似調琴　費晴湖
茫々滄海波如雪　疑入蓬瀛隔水深

近江の宝と書改め侍るもの
〻せ〻人の海〻〻

發志日詠
毫採帝可貴南羅志都々玉琴濃志良辨曽免
計理数迺宝遠

小林某

金三ノ四十三

夫此山ハ二方ひゝけて海ゝる海上と見ゆゝ前ハ有明の濱ゝ呼て東西數町のいつゝ二面の真砂地ゝて山の裾ゝ〳〵ゝれバ一株の松ゝ〳〵恰も畳ゝ敷るゝ如さの磯辺ゝり山路も海ゝ對ゝゆゝゝ平崇風烈ゝ〳〵ゝて松おのづゝ〳〵高くのびゝ地ゝ偃て這ゝ如く踊るゝゝ〳〵其形勢異ゝ〳〵ゝ原来かゝる松のゝゝて小栄茅萱の類ひも生せゝ洗ふゝ如さ砂山もをバ其美景ゝ言ゝ絶ゝり扨又向ゝ遥の灘伊吹大島とくゝ吉備の山〳〵中國路九州おゝも近ゝ見へ雄手ゝ筑州の山峰〳〵ゝ縫ゝ雌手ゝハ稲積秩父峠箱の岬江浦山漠を行船湊ゝ入舟磯ゝ引網浦の釣船衝鷗の飛ゝ〳〵ゝ皆此山の風景ゝて殊更名ゝ有明の月の夜おゝの眺望ゝハ須磨も明石も中〳〵ゝ及ばゝ〳〵ゝぞ想像まゝ

金三ノ四十四

象ゝ鼻　社頭の東北ゝ〳〵ゝ山の端ゝ岩のかゝ〳〵ゝ象の鼻のゝ〳〵故ゝ号ゝ此所ゝり海上ゝ眺望ゝ風景言語ゝ絶ゝ

行溪　宿屋の西の山方ゝり御舟ゝ上ゝ古跡ゝり

問答石　宿屋の西の山のすゝゝゝゝり日登上人八幡大菩薩ゝ問答ゝ〳〵ゝ跡ゝり〳〵ゝ

三本松　有明浦の南ゝゝり古松ゝゝると　北谷　社頭の北の谷間ゝり

七寶山觀音寺　琴ヲ彈山の半腹ゝゝり則神宮寺社僧ゝり四國遍禮第六十沈番の札所ゝり

本尊　正觀世音菩薩　座像の長二尺五寸弘法大師作

愛染堂　本堂の向ゝゝゝり愛染明王ゝ安ゝ　大師堂　弘法大師ゝ安ゝ愛染堂の右ゝあり

西金堂　正面磴道の上ゝゝゝり大六　藥師如来ゝ安ゝ

宝塔舊師　藥師堂の右ゝゝゝり　遍照塔　宝塔の四辺ゝ並ぶ小堂ゝり往の左右ゝ日天月天の彫物ゝ掲ゝ

弥勒堂　正面弥勒菩薩ゝ安ゝ右ゝ毘沙門天王左ゝ閻王各日登上人の縁ゝ置ゝ

太子堂　弥勒堂の右ゝゝゝり聖德太子ゝ安ゝ　地藏菩薩　訶梨帝母ゝ安ゝ　籠堂　中金堂太子堂の間ゝあり

十八景
飛閣清鐘
山里の夕日もとゝゝ海ゝゝ
雲ゝゝ
ゝゝ
ゝ

仝
北谷晩鶯
ゝゝゝゝ
ゝゝ
ゝゝ
ゝゝ
ゝゝ

是ゝゝ一ノ鳥居へ

十八景
曲洌飯帆
ゝゝゝ
ゝゝ
ゝゝ
ゝゝ
ゝゝ

仝
竹渓春霞
ゝゝ
ゝゝ
ゝゝ
ゝゝ
ゝゝ

十八景
水洞鏘松
峯絶ゝゝ
ゝゝ
ゝゝ
ゝゝ
ゝゝ

五所権現社　青丹明神社　孫勅堂の後山にあり　青丹の社八七十五神の摂社の上首なり

茶堂　孫勅堂の下にあり　鐘楼　本堂の左に　五智如来石像　愛染堂の傍にあり

二王門　南面金剛神の両像と安ス　天神社　二王門の内西　稲荷祠　同東の傍にあり

本坊方丈客殿庫裏寮舎蔵倉廩ハ観音堂の向ふに列せり　其余末院六坊ハ惣門の内に連る且金毘羅の社生眼の八幡宮天満宮

ハ此坊中の境内にあり

抑當寺久創至五十一代　平城天皇の御宇大同元年丙戌弘法大師唐土より帰朝の後琴弾宮に請で賽の法施を給ひしに大菩薩の御託宣其旨ありて此地に寺院を營み神宮寺と常に法味と八幡に進め奉ることを勤め給ひて則ち大師手づから観音の尊像ならびに太子の瑠璃光佛四天王ホとを作り給ひ緒堂を建立し安置したまふ石塔四十九基を起立し

金三ノ四十六

蓋都率の四十九重を表し給へるや又大師七種の陀羅尼を此山に納め國家の鎮押し給ふ故に七寶山と称ハ八葉にかたどり且九所の秘穴にして金剛界胎蔵界に表ハしぞ

寺中七坊　鏡照院　和合院　不動院　慈眼院　惣持院　寂静院　泉蔵院　右六坊八二王門より惣門までの間に両側に列せり　此一坊ハ伊吹島にあり

則當寺八八幡宮守護の社僧にして無本寺の寺に傳ふる所の御證文にあり

其文に曰

寛文七丁未年閏二月十八日　御判にあり

芝

濃州國豊田郡琴引八幡社僧観音寺と雲辺寺と地蔵院

ホ末院相縁双方ホ合令仏明文観音寺に琴引八幡社僧と成古院文を修ホ見に亦近代迄他蔵院法流ホ修

成も無相同に雖然社僧に本寺と有に寺文成に来白

法観音寺止減罷俗社僧に仮成可ホ勤仕正月礼後に

成ニ申如在来に名和者也乃後紙仏件

西金堂
アイゼン堂
大師堂
方丈
客殿
五智堂
食亭
天神社

観音寺
通路塔
塔ノウト
中金堂
コモリ所
太子堂
ミロク堂
五所コ現
青丹社
シュロウ
ナヤ堂
二王門
イナリ
天シン
ハヤシ吉
金三ノ四十七

日燈上人之墓　宿居の左の傍に巨巖と重て上に遠忌の平塔婆と建て傍に楠の大木あり

石の平塔婆の面に　卆　千百四忌倍増盛光塔と鐫す

大般若経曰
寧都槃是如来
霊廟也如来霊
塔也如来宝
塔也

金三ノ四十八

芭蕉翁早苗塚　上人の塚の前の傍に建り近頃古碑の後辺に俳友新に碑と建添且石垣燈籠等ともに造る

古碑之面　芭蕉翁早苗塚

新碑之面　早苗とりてやそうしきの人数　芭蕉

賛曰　先人帯河文魚也者埋翁真跡之短冊立此碑焉
歴年既久而将頽蠹仍於社友再修之
昔惟天保十龍次己亥年十月上浣

發起　半日庵五舊
百泉鶯居
木非苔石
杜麥木丈

芭蕉翁繪詞傳巻

志げよりぐ摺ける石を乃て乃ぐよ乃里とるけ入ゆ乃ぐ山傳ふ石おゝバ
土ゑ地ゑゝあゝ里ける者のちゝくゝ海辛ゑゝハけ山の上ゑゝ登り
と仕東の人ける麦ゆゑとあゝゝて世石と試ゑゝくるとゆゝみゝけ
石ゑゝあせハ石乃西下ゑゝゆゝゝ云

早苗ゝる手りやゝむゝりゝゝのゝ摺

志ゝバけゆハ芭蕉翁ゆ異の行御の時志けゝの里ての吟ゝるゝ所ゝ
廿ゝ湊乃紅冊とゝゝ地ゝて中の前塚ゝ称ゝるゝ秋ゝ時ゝゝゝゝ

芭蕉翁ハ伊賀国上野の藩士ゝり甚先祖ハ平家の侍弥平兵衛宗清の
末孫ゝて又ゝ松尾甚左衛門ゝて上野の赤坂ゝ住せゝ幼名ゝ金作ゝ号
ゝ後半七郎宗房ゝよび更て忠右衛門ゝゝ正保の始ゝ生ゝ明暦乃頃
出て藤堂家ゝ仕ゝ宮馬の業のいゝゝハ風月の道ゝ好ゝ和歌ゝよび俳諧
ゝて遊びて時の宗匠北村季吟ゝゝて師ゝ寛文六年の秋ゝゝ仕ゝ

金三ノ四十九

辞ゝて遁世ゝ是ゝり延宝の年ゝて師ゝ雲霞ゝゝ十ゝ勢せゝゝつの涙
ゝゝ東武深川ゝ住居ゝ庵の庭ゝ芭蕉ゝ数多栽ゝて楽ゝゝれるゆゝ住
庵ゝ芭蕉庵ゝよび芭蕉翁ゝ称せゝゝゝ廿頃年ゝゝ四十歳ゝゝゝ
ゝ此道の師ゝゝ事ゝ湖春又ゝ桃翁の号ゝよゝ変ゝ陰徳禁
ゝゝ桃の名ゝ桃青ゝゝゝ別号ゝ風羅坊ゝ云ゝゝ芭蕉ゝゝゝ等
ゝ風ゝ旅ゝゝゝ好ゝ観ゝゝゝ名ゝ俳船堂ゝ号ゝ八深川ゝ海ゝ
通ゝ地ゝて門伯東ゝ萬里船の詩の景ゝゝゝゝ俳諧の道ゝ達
正風体ゝ興起ゝ一家ゝ成ゝ道ゝ慕ゝ徒儀のゝ第ゝ門ゝゝの投拳
ゝゝゝゝ元禄七年十月十二日浪花南御堂ゝ於ゝ紀氏の別屋ゝて没ゝ行年五十一歳

有明ノ濱

琴ノ弾山の禁の濱ゝゝ当国ゝ一の絶景ゝゝ

有明ゝ濱やゝゝゝゝ

十八景
有明濱
有明落雁
白妙の浜乃
真砂に
有明月
うけとたうて
乃そおち
来る

仝
西尾秋森
青とゝゝる森の
浜乃青ゝゝれや
面ゝゝ深れ
秋乃
ゝゝ入ち
来

金三ノ五十

仝
問答石郭公
一声ハいとゝの
わゝ
ゝゝふゝと
ゆゝゝ
ゝゝゝ乃
山ふゝゝ
ゝゝ

仝
近湖漁網
雨ゝれく船ゝゝ
ゝる
ゝゝゝけ
網ゝ乃
青ゝも
の浜
ゝゝ
浜

矢ノ瀬

十八景

攢峯積雪

そこ迄の峰ハ
見くるしく
越支乃道を
ふさぐ

仝

列嶼霽雨

海原や西乃
名ちかき
雲とくもり
八十嶋
仲津

中国路

九福レヒロ

伊予嶋

観音寺山

仝

幽村竈烟

夕くれハ
村里も
烟
赤ハ
おひ
雲

仝

萬頃沃田

そこ
山を
ぬ
夕
の
時
四
西ハ
色

伊豫路

大島

竹屋村

三本松

花明や淀陰宝しきりを雨　仙信美

不枯の夜ハ有明乃ゝ海れれ　舟静

山口ノ清水　禁の崖ニ湧く金剛水ゝ専云弘法大師の御杖ゝ所ゝ湧出ゝ以ゝ
清水ゝ名ゝ付ゝ近隣ゝ双の清泉湧ゝ門口の在苅屋村ニ百余家ゝ
清水ゝ用ゝ

悪魔石　清水の辺りの岨ニ湧く形ち悪魔の面ニ彷彿ゝ

燧灘九瓶島大嶋伊吹島　百計あ有て此里ニ観音寺の坊中泉蔵院在住ゝ
もゝ有明の浦の向ふニ湧く就中伊吹島ハ家数三

高谷神社　高谷村稲積山ニ湧く高稲積宮と云又豊稲積ゝも云稲積明神と称ゝ

祭神　一座　木花開耶姫命　延喜式神名帳ニ出

二代實録　貞観六年九月十五日戊辰讃岐国正六位上高谷ノ神
授従五位下

不動ノ籠　稲積山の後方岡本村ニ湧く未ゝ詳ゝ拾遺の巻ニ図ゝ

一夜菴　琴弾山の連峯七宝山與昌寺の境内ニあ山崎宗鑑ゝ幽居ゝ
菴中ニ宗鑑の像と安ゝ未ゝ詳ゝ拾遺の篇ニ出ゝ

宗鑑ハ近江國の住人ニて緒方宗鑑の長子支那孫ニ郎と称ゝ又通稱寛三
郎ゝ号ゝ乾山光琳の兄ニ足利家ニ仕ゝ後城南山崎小隱遁ゝ故ニ山
崎と称ゝ書法光悦流ニ連ゝ歌おゝび俳諧と能ゝ天文十二年ニ
没ゝ年八十五ゝぞ一夜菴の説結さまゝ有ゝものゝも疑ニ洩ゝ

伊勢ニ郎義盛智謀之古趾　琴弾山の麓ニ古趾の標ゝ有ゝ盛衰記ニ
元暦年間源義経屋島ニ平家と合戰の時分平軍阿波民部大輔成能
ゞ子息傳内左衛門尉成直ニ千余騎と率ゝて河野四郎通信と攻ゝて
伊豫國越ゝ閉ゝと義経伊勢ニ郎義盛ニ命ゝて案ニ方捕ゝて来る
べゝと下知ゝ義盛兼ゝ先下龍の男ニ人と呼出ゝ腔中とさせ裏
笠ニ旗籠ゝ持せ傳内左衛門ニ伺ひ遇ゝ言べき様と示ゝ教へ
一日路先ニ立せて伊豫の國越さゝ義盛ハ十七騎の良黨と具ゝて一日
路後ニて向ひ来ゝ人ゝ見て是ハ嗚呼ゝ為業ニ僅ニ十七騎の

金三ノ五十三

伊勢三郎義盛謀を以て傳内左衛門成直が
二千余騎と降参やつむ

勢とりつてこ千余騎の無し召捕んとゝ余うる大膳もうしと言ひつくりる
傳内左衛門ハ河野が鉢へ向ひしーうぶも通信ハ屋島の合戰へ加はりて國こゝの
らぶまバ殘る家子郎等と尋ゝ討取館へ火とりけ生捕ゞもと詐ゑ引連
て屋島の合戰も芝來るゝして伊豫の國より漢波とさして舩ゝ乗る通すく
彼下鶴の男小會ゝ盛直是と見て已ハ何所より何國へ通る者ぞゝ問ふ屋
島より伊豫へ罷る者ゝて候ふ答ふ備屋島ハ合戰いぐゝ問ふ男答
つて云様伊豫國の河野四郎殿の伯父福良新ゝ郎殿の頭實檢の日源の
九郎判官とゝ名のつて雲霞の勢屋島の内裏へ押寄せ鬨ゝ上軍ゝて候
ひしゝ源氏の房ゝ内裏と燒きて平家ハ舩小乗て下會ゝ戰い給い程と
平家ハ無勢源氏ゝ多勢なれバ終ゝ平家負て生捕るもいつゝなるも
あゝて其數とゝ多ゝ中ゝも阿波の太輔ゝの降人ゝ来れ河野四郎殿ハ千余騎と

て屋島へ馳つゝ其余四國九國より軍勢數萬馳集りて阿波讃岐の浦ゝ源氏の軍
勢充滿ゝて結て過ぬ成鳥閑ゝ心弱ゝ其父民部太輔も降人ゝ出ゝ南ゝ
ゝ夢以て臆ゝ去ゝ下鶴の境の夏ゝれバ信用とゝ不足ゝ尚も實否を
問んゝと馬と打ゝ行ゝ讃岐國

源平盛衰記ニ云木郡琴ゝ造宮ゝいゝ考ふる小ゝ木郡琴ゝ造宮ゝしゝ云ふ也ゝ小木郡
東讃ゝて西ハ香東山田の二郡ゝつゞく東ハ寒川郡ゝ列ゝ南ハ阿州阿波郡隣る然
もバ伊豫國ゝ到る便ゝ聊もゝ是今ゝ豊田郡琴彈宮ゝ豊田郡西讃ゝ
西ハ伊豫國ゝつゞく往返の街道ゝ東ゝ讃りてこ所郡ゝいるゝいゝ豊田とこ所に
遠いこ所とこ木ゝ宮ゝ琴ゝ彈と琴造ゝ書損ゝものゝ故ゝ改め記之
豊田郡琴彈宮ゝの人行ゝて伊勢三郎義盛傳内左衛門と行會ゝ我盛鎧踏
ゝ打つゝ切ゝ傳内左衛門と見ハ辯日ゝ是ハ源氏の良等ゝ伊勢三郎義盛と
い者ゝ平家ゝ屋鳥の軍ゝ負け内裏ゝ下人ゝの家ゝ皆燒ハ大臣ゝの父ゝ松ゝの公

達恥あるハ太底虜らを給ふ汝が父民部の大輔頼と延て降人に参じ櫻間の太夫八
勝浦にて虜る此二人義盛頼る汝が父ハ降人ゐまゞ頼と延て櫻間の太夫を
通まゞ〳〵源氏に隨ひ奉るべ沒ゐ猶意趣あるゐの顔とも見故郷に歸ん
と欲ハゞ義盛願ひて善ゐ計らひ斯りと背き給ふ通し侍るまゝ〳〵弓
取直し失束と解〳〵成直ハ〳〵下臈が詞とい人義盛が演言相違ふ〳〵と
思ひ給ハゞ父降参の上成直ゐつて同じ事〳〵てうと弛し甲を脱ぎて義盛
に従ふ義盛降人の法と以て大將の幷に將向ふ是義盛が縗ゐつてゐ〳〵僅ゐ
十七騎とゐつて二千余騎と容易く従へ〳〵古今に雙びなき勲功なまゞ判
官あれと賞し給ふ父民部大夫実に降参せ〳〵ひ〳〵ゐ既に成直虜
らまゐ〳〵所且平家の軍旁東ゐ〳〵思ふ折〳〵成直大將の命にゐて父が狀
と遣ハ源平之合戰勝劣雲泥也後勘有恐前降源家早任同心之思必遂之面

謁之志と書〳〵斯〳〵程ゐ成能も源氏に順ふ故に彼國の住人等皆おとゝく〳〵
源氏に属ハと云

金毘羅参詣名所図會二之巻終

国立公文書館
National Archives of Japan